

# Blitzen Times Vol. 101 March.2026



## Race Report

- |              |   |
|--------------|---|
| 2026.3.15    | Coupe du Japon Aichi International 2026 XCO |
| 2026.3.21-22 | ジャパン・マウンテンバイク・カップ 2026 XCC/XCO              |
| 2026.3.15-19 | ツール・ド・台湾                                    |
| 2026.3.28    | JBCF 広島三原ロードレース                             |
| 2026.3.29    | JBCF 広島クリテリウム                               |

# 愛知国際XCO開幕戦で 沢田が完勝

シクロクロス、MTB、ロードレースをこなす三刀流・沢田時が、アジア大会代表選考を兼ねた「Coupe du Japon Aichi International 愛知国際 2026 XCO」に出場。今年のアジア大会と同会場・小幡緑地で行われた重要な一戦で、副島達海選手ら強豪との一騎打ちを制し、マウンテンバイクシーズンの開幕戦を見事な勝利で飾った。

シクロクロス、マウンテンバイク、ロードレースの三競技を並行して戦った沢田時にとって、「Coupe du Japon Aichi International 愛知国際 2026 XCO 男子エリート」は2026年MTBシーズンの開幕戦となった。会場は愛知県名古屋守山区の小幡緑地。今年のアジア競技大会マウンテンバイクと同じコースであり、日本代表選考に直結する重要レースとして海外勢も含めた強豪が集結した。

同じ週末、ロードチームはツール・ド・台湾でシーズン初戦に挑んでおり、Astemo 宇都宮ブリッツェンとしてはロードとMTBの両輪で好スタートを切りたい節目の一戦となった。レースフォーマットは0・26キロ+3・7キロ×8周の計29・86キロ。快晴の空の下、12時45分にスタートしたコースにはタイトな登りやテクニカルセクションが随所に組み込まれ、脚力とバイクコントロールの両方が問われる設定だった。

1周目を終えた時点で沢田は先頭でコントロールラインを通過し、その背後にシクロクロス全日本選手権でも争ってきた副島達海 (TRK Works) がひたりとマ

クする。序盤は先頭交代を繰り返しながらの様子が見え続くが、残り6周では沢田が一時3位までポジションを下げ、副島が先頭に立つ場面もあった。

レース中盤には海外勢を含む4人の先頭バックが形成され、沢田は5周目に2番手まで順位を戻す。ハイペースな周回が続くなか、残り3周で2人が脱落し、先頭は沢田と副島の2人、約10秒差で松本一成 (ホンダカーズ群馬 / Hifachig) が追う展開に。副島は途中で転倒しながらもすぐに体勢を立て直して単独で先頭に戻るなど、その実力を見せつけ、先頭2人の駆け引きは周回を重ねるごとに緊張感を増していった。

勝負どころとなったのは残り2周に入ったタイミングだ。それまで「ギリギリでついていくなかった」と沢田が振り返るように、両者の力は拮抗していたが、コース上には沢田が「ここなら自分が先行できる」と目星をつけていたテクニカルな登りがあった。そこまで脚をためて我慢を重ね、残り2周でその区間に差し掛かると一気にアタック。狙い通りに副島からリードを奪い、その差はすぐに約5秒、終盤にはおよそ18秒

へと広がった。

最終周に入っても沢田のペースは大きく崩れず、後続との差を冷静にコントロールしながら攻めの姿勢を維持。最後のテクニカルセクションも危なげなくこなして、そのまま単独でフィニッシュラインへ飛び込んだ。タイムは1時間24分24秒06。2位・副島に約5秒、3位の JINWEI YUAN (中国) に約10秒差をつける完勝で、アジア大会代表決定に大きく前進する価値ある一勝となった。

レース後、沢田は「ほっとしたというのが一番」と胸の内を明かし、「決めていたテクニカルな登りで思い切って踏み、差を作ることができた」と勝負のポイントを振り返る。翌週には東京五輪の舞台・伊豆でのUCIレースが控え、「怪我なく、いいイメージで走り切りたい」と前を見据える沢田。ロードのツール・ド・台湾と並び、MTBでも最高の形でシーズンインを迎えたこの週末の勝利は、チーム全体にとっても心強い追い風となった。



# 伊豆で示した今の実力と、世界への課題

東京五輪会場となった伊豆MTBコースで開催された「スルガ銀行 presents ジャパン・マウンテンバイク・カップ 2026」。初日のXCCでは、アジア勢が集う短期決戦で沢田時が3位表彰台を獲得し、日本チャンピオンとして存在感を示した。続くXCOでは序盤から先頭争いを展開しながらも6位フィニッシュに終わり、アジア大会、来年のアジア選手権、さらには五輪へ向けた課題と収穫が二気に浮かび上がる週末となった。

静岡県伊豆市・日本サイクルスポーツセンター伊豆MTBコースで行われた「スルガ銀行 presents ジャパン・マウンテンバイク・カップ 2026」。東京五輪会場であり、MTB 2027年アジア選手権の舞台ともなるこのコースで、Asteno 宇都宮ブリッツェンの沢田時は、アジアの強豪相手に自身の現在地を測る2日間を挑んだ。

大会初日はUCI Class3のXCC。ロックセクションのドロップオフやタイトコーナーが連続するテクニカルレイアウトに、アジア各国から30名が集結し、10週の短期決戦がスタートした。ホールショットは副島達海 (REVOCKS)、沢田は5番手前後で様子を見つつ周回を重ね、先頭グループから決して離れない。中盤には6人の先頭集団の中で4番手をキープし、残り3周で5人に絞られると2番手へ浮上。残り2周ではJinwei YUAN (中国)を相手についに先頭に立ち、自ペースを上げて主導権を握りにかかった。

しかし中国勢とカザフスタン勢は粘り強く対応し、

差を広げきれないまま最終周回へ。心拍も脚も限界に近づくなかで粘ったものの、最後のうりで再び抜け出され、優勝 YUAN、2位 Denis SERGENKO (カザフスタン) に続く3位でフィニッシュした。レース後、沢田は「最低限、表彰台の形は作れたが、仕掛けが少し早かった」と振り返りつつ、「XCCで心拍を振り切った翌日は体が軽く感じる人が多い」と、翌日のXCOへも手応えを口にした。



2日目のUCI Class XCOは、0・03キロ+4・10キロ×7周のタフなレイアウト。長い上りと難度の高いロックセクションが選手を追い込み、「選手との戦いであると同時に、コースとの戦い」と沢田が表現する厳しいコースだ。出走27名の中には、前週の愛知国際と今大会XCCを制したYUANをはじめ、中国やカザフスタン、日本の強豪がそろった。

レースは春らしい穏やかなコンディションでスタートし、ホールショットは副島。沢田はそれに続き、ロックセクションを4番手でこなすが、長い上りでやや後退し、序盤は5位前後で展開した。

中盤には一時8番手まで順位を落としながらも、「日本チャンピオンとして日本人の中で一つでも前にと自らを鼓舞して追走。6周目終了時には6位までポジ

ションを戻すが、先頭ではYUANを先頭に中国勢3人がレースを完全にコントロールし、表彰台を独占。沢田はトップから2分43秒差の6位でフィニッシュした。「言い訳なくリザルト通り厳しい戦いでした」と率直に語った沢田は、「先週の愛知では同じメンバーに勝った一方、コースが変わるだけでこれだけ差が出る」ともコメント。

来年のアジア選手権と同じ伊豆コースで行われることを踏まえ、「どんなトレーニングが必要かは見えた。この1年でしっかり積み上げたい」と前を見すえている。XCCでアジア勢と互角に渡り合い表彰台に立ち、XCOで世界との差を突きつけられた2日間は、アジア大会とアジア選手権、その先の五輪へ続く長い道のりの出発点となるレースとなった。



チームプレゼンテーション



第1ステージ



第2ステージ



## 新体制初戦、 攻めて戦い抜いた台湾5日間

UCIアジアツアー2.1「ツール・ド・台湾」に、新体制Astemo宇都宮ブリツェンが5名で挑んだ。台北の市街地クリテリウムから山岳頂上フィニッシュ、南部の超高速ステージ、そして15年ぶり復活の「幸福台九線」。結果以上に、逃げとスプリントにこだわって戦い抜いた5日間だった。

2026年シーズンの国際初戦にAstemo宇都宮ブリツェンが選んだのは、UCIアジアツアー2.1、5日間・全約635キロのツール・ド・台湾だった。メンバーはフォン・チュンカイ、セルジオ・トウ、岡篤志、宮崎泰史、増田成幸の5名。新アサインのチームバイクとともに、アジアのトッププロチームが集う舞台に乗り込んだ。

開幕の第1ステージは台北市街地80・6キロのクリテリウム。序盤からアタックが連発するハイスピード展開となり、終盤はワールドチームが主導権を握る中、ブリツェンもスプリントに備え隊列を組んだが、残り1キロでの集団落車に岡が巻き込まれてしまう。救済規定によりタイム差は付かなかったものの、総合争いを考えると苦しいスタートとなった。

勝負どころと位置づけた第2ステージ桃園「クイーンステージ」は、終盤の2級山岳ゴールが総合を左右する123・31キロ。宮崎と岡を山頂決戦まで残すプランで臨んだが、コースミスによる中断やメカトラブルなどが重なり、肝心の登り区間に入る前から隊列が崩れる。先頭は少数精鋭の登坂勝負となり、宮崎と岡はここで大きくタイムを失い総合争いから後退。代わりに「以降はステージ優勝狙いに切り替える」という方針がチーム内で共有された。

その流れを受けた第3ステージ高雄は、山岳ポイント3つを含む146・44キロのロングコース。ブリツェンは「逃げて勝機を掴む」プランを徹底し、セルジオをはじめフォン、宮崎が次々とアタックを試みるが、総合上位のタイムボーナス狙いもあって逃げは許されない。それでも攻撃の手を緩めず、岡も終盤に果敢に仕掛ける。最後は集団スプリントとなり、岡が9位のフィニッシュ。リザルト以上に、「逃げとスプリントの両方で戦える」という手応えを掴んだ一日となった。



第3ステージ



第4ステージ



第5ステージ

総合成績だけを見れば、目標としていた表彰台には届かなかった。しかし、新体制として初めて臨んだ国際ステージレースで、逃げに乗り、アタックし、スプリントに絡むという役割を全員が果たしながらレースを動かしたことは、大きな財産となる。チームはここで得たスピード感と連携の手応えを胸に舞台を国内レースへと移し、ツール・ド・台湾での悔しさと自信を糧に、2026年シーズンをさらに加速させていく。

最終第5ステージは、東部の「幸福台九線」を北上する153.71キロ。かつて西谷泰治氏が優勝し、若き日のフォンも上位に入った伝統コースが15年ぶりに復活し、今大会最長ステージとしてフィナーレを飾った。花東縦谷のアップダウンが続く高速コースで、ブリツェンはこの日も序盤から攻勢に出る。残り109キロでフォンが逃げに乗り、一時は1分差までリードを広げるが吸収、続いてKMANのヘースアップで22人の先頭グループが生まれ、ここに宮崎が入り最大1分差まで開くも、終盤で大集団に飲み込まれた。残り30キロを切るとドウが再びアタックに反応し、最後は増田が岡とフォンを良い位置へと引き上げて上り基調の集団スプリントへ。表彰台こそ逃したが、最後まで攻める姿勢を貫いて5日間を締めくくった。

第4ステージ・屏東131.2キロは、山岳ポイントこそないものの、細かなアップダウンと中間スプリント3つが組み込まれた読みづらいコース。ミーティングで掲げたテーマは「必ず誰かが逃げに乗る」。その言葉通り、セルジオがアクチュアル直後にアタックし、増田とフォンも反応を繰り返す中、残り88キロで増田を含む5名の逃げが決まる。メイン集団は総合リーダーチームがコントロールし、タイム差は2分弱で推移。増田は無理にポイントを狙わずロングエスケープを続けるが、残り16キロで吸収される。最後は集団スプリントとなり、岡は位置取りに迷い伸び切れなかったものの、チームとしてプランをやり切った一日となった。



## 広島坂を制す 谷順成、執念の今季初表彰台

Jプロツアー2026シーズン開幕戦となった広島三原ロードレースで、Astemo宇都宮ブリッツェンのキャプテン・谷順成が執念の走りで3位表彰台を獲得した。真夏開催から一転、春に移った中央森林公園のタフなコースで、若手とベテランが噛み合ったチームは、国内初戦から存在感を存分に示した。

Jプロツアー2026シーズンが、広島県・中央森林公園の広島三原ロードレースで幕を開けた。ツール・ド・台湾で実戦を積んだAstemo宇都宮ブリッツェンにとって、待望の国内初戦である。昨季はチームランキング1位を獲得しながら個人総合に届かなかっただけに、「個人・チームのダブルタイトル奪取」が今季の明確なテーマだ。

1周12・3キロ、名物「広島八谷建設3段坂」を含むアップダウンを10周するコースは、総獲得標高2、300メートルのタフな設定。例年真夏の灼熱に晒される大会だが、今年は3月開催となり、気温21〜22℃と走りやすいコンディションの中で103人がスタートラインに並んだ。

ブリッツェンは谷順成を軸に、沢田時、岡篤志、武山晃輔、菅野蒼羅、阿瀬来夢の6人体制。アクチュアルスタート直後、今季ロード初戦となる沢田がファーストアタックを敢行し、単独で25秒差を築いて2周目へ。約1周で吸収されたが、相手に自由にさせない積極策で序盤からレースを掌握しにかかる動きだった。

中盤には地元ヴィクトワール広島のリオネル・キンテロらが抜け出し、6周目には1分11秒差まで広がる場面もあったが、7周目で吸収され再び集団は一つに。そこからはアタックが連鎖し、ヴィクトワール広島のエリオット・シユルツが単独で先行する展開となる。

勝負どころは、残り2周からの3段坂と最終周回だった。アタック合戦の末、先頭は8名に絞られ、谷とシユルツ、KANAN勢3名、群馬マンモスレーシング、VC FUKUOKAという顔ぶれが最終決戦に挑む。ブリッツェンから先頭グループに残ったのは谷ただ1人。これまで多くの動きに対応してきた岡は9周目の3段坂で遅れ、チームの命運はキャプテンの脚に託された。

最終週の3段坂で先頭はバラけ、島崎将男(群馬)とシユルツが抜け出すも、坂の終盤でシユルツが再加速し独走態勢を確立。谷はその背中を追う4人の追走グループへ入り、残された表彰台を懸けたスプリントに備えた。先着したのは独走を貫いたシユルツ、続いて新城雄大(KANAN)。その1秒後、追走4人のスプリントで谷が力強く踏み切り、3位表彰台をつかみ取った。

かつてヴィクトワール広島に所属し、この地域に暮らした経験を持つ谷にとって、中央森林公園は「第二の故郷」とも言える場所。その地でブリッツェン加入4年目にしてロードレース個人として初の表彰台を獲得したことは、数字以上に大きな意味を持つ。鈴木真理監督も「海外勢の動きに前に対応し、レースをコントロールする姿は、これまで以上の成長を感じた」とキャプテンを称えた。

リザルトは1位シユルツ(広島)、2位新城(KANAN)、3位谷(ブリッツェン)。チームとしては勝利こそ逃したものの、岡9位、沢田20位など、内容・結果ともに今季の飛躍を予感させるスタートとなった。翌日の広島クリテリウムに向け、谷は「まずは最高のスタート。明日は岡とともに優勝を狙いたい」と表情を引き締めた。



# 岡篤志、豪脚炸裂 広島市街地で悔しさの2位

広島三原ロードレースで谷順成が3位表彰台を獲得した翌日、舞台を広島市西区商工センターの市街地コースへ移して開催されたマリモホールディングス広島クリテリウムで、Astemo 宇都宮ブリッツェンのエースプリンター・岡篤志が2位に食い込んだ。昨年の覇者として連覇を狙った一戦は、チームが完璧な列車を組んだ末の「勝てる悔しさ」が残るレースとなった。

Astemo 宇都宮ブリッツェンの国内ロードシーズン開幕を告げる広島2連戦は、2日目にマリモホールディングス広島クリテリウムを迎えた。

前日のロードレースで谷順成が3位表彰台を獲得し、チームとして上々のスタートを切ったブリッツェンは、舞台を広島市西区商工センターの特設コースへ移し、昨年優勝の岡篤志をエースに据えて連覇と2日連続の表彰台を狙った。

1・7キロのフラットな市街地周回コースには、コーナーが3カ所配置される。30周・51キロのレースは、コーナーの立ち上がりでどれだけ脚を温存しながらも、終盤に向けて集団前方でポジションを確保できるかが勝負の鍵を握る。

レース前、ツール・ド・台湾からの連戦で「まだ本調子とは言えない」と語っていた岡だが、チームメイトの好走に刺激を受け、「連覇と勝利だけを狙う」と静かに闘志を燃やしていた。



レースは序盤から各チームがアタックを繰り返出し、集団は活性化。ブリッツェンも阿藤来夢や沢田時らが前方で動き、危険な逃げを許さないようチェックを重ねる。コーナーでの落車リスクが高いコースだが、序盤に発生した落車も巧みに回避し、赤いジャージは集団の中で存在感を保ち続けた。



残り2周、商工センターのストレートに入ると、ブリッツェンはウィクトワール広島列車の後ろに狙いを定める。武山晃輔、谷、岡、沢田の順で強力なトレインを形成し、密集する集団の中で理想的な位置取りを確保した。他チームのトレインが入り乱れる中でも、赤い隊列は乱れず、周囲を押しつけるように前方へとじわじわポジションを上げていく。

運命のファイナルラップ。ホームチームの広島はアシスト3人を残してエース孫崎大樹を徹底サポートし、その直後にはZMANが草場啓吾のために新城雄大を先頭に強烈なヘースアップを仕掛ける。対する岡は、最終局面で完全なチームトレインを失い、実質的に単騎でのスプリントに挑む形となった。

最終コーナーを立ち上がり、フィニッシュへと伸びるホームストレート。先にスプリントを開始したのはZMANの草場。それを岡が鋭い加速で追いつけ、一時は並びかけるほどの伸びを見せたが、わずかに届かず2位でのフィニッシュとなった。3位には新城が入り、表彰台の半分をZMANが占める結果となった。

岡はレース後、「優勝を狙っていただけに、2位は悔しい」と率直な心境を吐露する一方で、「チームメイトが素晴らしい動きをしてくれたからこそその結果。最終盤のポジションは自分の課題」と冷静に自己分析した。

前日のロードレース表彰台に続き、この日も2位表彰台と、ブリッツェンは国内初戦で2日連続の表彰台を達成。ツール・ド・台湾から続くタイトなスケジュールの中でも、シーズン序盤から結果を残したチームの走りは、次戦・ホーム宇都宮での快進撃を予感させるものとなった。

レース中盤、集団のペースが一段と上がると、各チームが次第にスプリントに照準を合わせ始める。岡も徐々に隊列の前方へとポジションを引き上げ、勝負どころに向けて静かに準備を進めた。終盤に差し掛かると、地元・ウィクトワール広島とZMAN Racing Teamがそれぞれトレインを組み、集団先頭で主導権争いを展開。ブリッツェンも残り2周で勝負のスイッチを入れた。



3月12日、台湾・台北、MERIDA 5代目 REACTO「BLITZEN EDITION」が発表されました。MERIDA 本社 × MERIDA JAPAN × Astemo 宇都宮ブリッツェン。その思いが形になったスペシャルチームカラー。ブリッツェンの象徴である「赤」をさらに研ぎ澄まし、ヘッドチューブにはライトくんロゴを配置。速さ、存在感、そしてチームスピリット。すべてを纏った2026シーズンのブリッツェンマシン。多くのメディアが駆けつけた熱気ある会場で、MERIDA 5代目 REACTO「BLITZEN EDITION」の発表が行われました。選手たちも、スペシャルカラーの REACTO についてそれぞれ熱いコメントを披露。台湾自転車界を背負うフォン・チュンカイ、

セルジオ・トゥには、多くの記者が集まり、次々とマイクが向けられました。実際に生で見る MERIDA 5代目 REACTO の造形は、前作からさらに大きく進化しています。その印象は、造形の進化だけではなく走りそのものが大きくバージョンアップ。選手たちからは「圧倒的に速い」「タイムトライアルバイクに乗っているみたいに速い」そんな声も上がっています。この一台とともに今季は挑みます。

新型 REACTO と SCULTURA は、全国のメリダ・パートナーショップと公式オンラインショップにて2026年4月末まで予約受注が可能です。



私たちはAstemo宇都宮ブリッツェンを応援しています。

# Astemo



Thank you for your support.

Blitzen 7